

私立大学研究ブランディング事業

2019年度の進捗状況

学校法人番号	261013	学校法人名	学校法人 立命館		
大学名	立命館大学				
事業名	立命館ライフサポート科学で切り拓く高齢化日本の持続的発展モデルの構築				
申請タイプ	タイプB	支援期間	4年	収容定員	31768人
参画組織	立命館グローバル・イノベーション研究機構				
事業概要	<p>21世紀における持続可能で豊かな社会の構築に向けて大学の貢献が求められている。本学では学長のリーダーシップによりこの課題に挑戦する政策的課題解決型の「立命館グローバル・イノベーション研究機構 (R-GIRO)」を2008年に設立し、「地球の自然回帰」の理念のもと、「自然共生型社会モデル」の形成に貢献してきた。2016年度からは少子高齢化でも発展する社会を目指し、「人間共生型社会モデルの形成」に挑戦している。この本学の理念に沿い、ブランディング事業も4人に1人の高齢者の「社会貢献の推進」に軸足を置き、高齢化社会でも経済発展する「高齢先進国の日本モデル」を形成し、海外に波及させる事を目的とした。</p>				
①事業目的	<p>日本の「高齢先進国」としての現状分析として、「高齢化による医療費・介護費の高騰→社会保障費の増大→国家財政の逼迫→若者への負担増大→若者の将来への希望喪失→少子化の加速」という負の連鎖による国家的危機感が存在している。</p> <p>これに対し本ブランディング事業では、主としてロボットを介在させた運動促進により、高齢者の心と体の健康維持・増進の実現を図ることを当面の目的とし、前記の負の連鎖を、「高齢者が現役で生産労働に貢献→生産年齢人口の増大→医療や介護費の低減→国家財政のゆとり→若者の負担軽減→若者の将来への希望獲得→少子化の抑制」という正の連鎖に変える「日本モデル」の構築を行い、日本経済の発展に貢献することを最終目的とする。</p> <p>この正の連鎖を実現するために、本学では第3期R-GIROの目的として「少子高齢化社会での持続的発展モデルの構築」を掲げ、2016年度より11のプロジェクトを採択し研究を進めている。この中の下記4プロジェクトを本ブランディング事業として特化して研究を進めると同時に、「少子高齢化研究」を立命館大学の研究ブランドとして国内外に広めるため、学術論文、報道機関、産学連携等による研究成果発信を重点的に進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 2) ロボットを高齢者の健康や生活維持に活用できるプログラムの設計 3) 心の健康を維持・増進するロボットの開発 4) 地域が主体の高齢者の健康づくり 				
②2019年度の実施目標及び実施計画	<p>1. 研究面での実施目標及び実施計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 ポリマーなどの先端材料を利用して、ロボットを従来よりも小型、軽量、柔軟、安価とすることで、ロボットの利用を拡大する。この研究開発と産業化のために、材料、センサ、構造、制御、システム化、産業化など多様な分野の研究者と企業の協力体制を確立し、本事業を実施する。 2) ロボットを高齢者の健康や生活維持に活用できるプログラムの設計 本プロジェクトにおいては、筋量が減る症状であるサルコペニアの察知マーカーの探索と測定法の開発を通して、からだ活性化のための科学技術について、工学・薬学・生理学の連携アプローチにより取り組んでいる。特に、骨格筋や心筋といった「筋組織を活性化させる科学技術」を取り上げ、研究を展開している。生体標本採取に関しては生検ツールの研究開発を推進するとともに、低侵襲医療応用に期待されているソフトマイクロマシン技術の展開についても積極的に取り組む計画である。 3) 心の健康を維持・増進するロボットの開発 本年度の実施目標は、音と香りを中心とした知覚環境制御技術、バイオマーカーによる運動に対する行動・効果の予測技術、健康行動センシング/評価技術、ICTを基盤としたフィジカル/メンタルヘルスクア技術の各基盤技術を確立することである。 4) 地域が主体の高齢者の健康づくり 「運動による世代間交流を通じた健康づくり」に関する研究および実践を行うことを目的とした。福島県における予防医学・健康づくりのニーズ調査・フィールドワーク調査を実施し、高齢者の健康、地域コミュニティの活性化、地域の安全安心への取り組み、運動による世代間交流を通じた心と体の健康づくりの推進を目指した。 <p>2. 広報面での実施目標及び実施計画</p> <p>研究成果を国内外に適時広報することにより、研究と大学のブランディング向上を加速させることを目標とする。特に本成果は、日本のみならず高齢先進国として海外への情報発信の必要性和、社会実装への急務から産学連携に結び付く下記の計画に力を入れる。重ねて、今年度は若い世代に対して立命館の特色ある研究を発信・興味喚起を行う事業を展開する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 海外への発信強化策：英語版ホームページ更新 2) 国内への発信強化策：各種シンポジウム開催、日本語版ホームページ更新 3) 中学生・高校生への発信強化策：中学生・高校生に向けた研究紹介パンフレット作製・配布、立命館附属高校・提携校に向けた出張セミナーの企画・運営 4) その他発信強化策：市民講座の企画・運営、次世代研究に対する支援 				
	<p>1. 研究面での成果</p> <p>高齢者支援用ソフトロボットの開発、高齢者の生理心理的健康増進を目指した筋組織の活性化・知覚環境制御技術・健康行動センシング技術の開発、さらに地域コミュニティの活性化による高齢者の健康づくり手法の開発などの成果を得た。具体的成果はシンポジウム等で社会に発信した。特にソフトロボットの産業化を目的とした企業約100社の立ち上げや、英国最大のスポーツ・健康展示会</p>				

<p>③2019年度の事業成果</p>	<p>「ELEVATE2019」において国際的に高い評価を得たことが特筆される。 査読付論文（143報）、口頭発表（海外 145件、国内 327件）、シンポジウム・講演（33件）、新聞・TV等報道（1件）、産学連携（22件）、外部資金獲得（22,081万円）、図書（39件）、特許（4件）、受賞（11件） このようなブランディング事業における研究成果とその発信は、立命館大学研究全体の活性化に大きく貢献している。</p> <p>2. 広報面での成果 本学広報課とも更に広報展開の連携をはかり、また一貫教育部門と連携した情報発信に注力した。 1) 日本語版・英語版のホームページを通じて、動画の配信など国内外に向けた発信を強化し、またR-GIROとの共催シンポジウムの開催（総計7回）などを行った。 2) 中学生・高校生に向けた研究紹介冊子の作製・発行(VOL. 3、7,400部)、また立命館附属高校・提携校向けの出張版ライスボールセミナー(若手研究者による研究紹介&大学院での学び喚起のセミナー)を本格的に実施した。総計27回(日本語24回・英語3回)開催し、高校生を中心に延べ2,097名の参加があった。 3) 立命館の特色ある研究の情報発信として、海外から研究者を招いた国際年縞研究会の開催および宇治市での市民講座、福井県の高校生を対象とした年縞博物館ガイドツアーを企画・実施した。 4) イノベーションジャパンやJapan Super Sience Fairやエコプロ展などの企画支援を行い、科学研究発表への積極的な関与を行った。</p>
<p>④2019年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>私立大学研究ブランディング事業が1年短縮された事を受けて、当初計画から未達成の課題について学内での予算措置をふまえ目標達成を目指していく。 (自己点検・評価) 1. 研究進捗の自己点検・評価 「私立大学研究ブランディング事業運営委員会」において、「私立大学研究ブランディング事業運営委員会」を月に1度開催し、研究に関するアドバイスをを行うとともに、半年ごとに提出される報告書に基づき進捗状況が検討され、今年度の研究成果及びその発信は前述の数値が示すように順調に行われていることが確認された。 特に、成果の実用化を目的とし約100社の協力支援企業群を形成したこと、国際会議や学術論文を通し成果の積極的な報告を行ったこと、研究基盤となる技術を開発し来年度以降も継続して技術統合、社会実装に向けた準備を行えたこと、質的研究法に関する日本初の研究センターである「立命館大学ものづくり質的研究センター」を設置し、地域と連携をしながら社会貢献をしていく基盤ができたこと、など本事業の推進に大きく寄与した成果が見られた。</p> <p>2. 広報戦略の自己点検 日本語版・英語版のホームページの更新、シンポジウムの開催は当初計画した以上に推進することができた。 中学生・高校生向けに研究を分かりやすく紹介するパンフレットは好評の中、第3号まで号数を伸ばした作製となり、総計27回開催した立命館附属高校・提携校向けの出張版セミナーは9校を対象に延べ2,097名の参加があり、次年度の継続開催も要望されている。次年度以降は立命館附属校・提携校だけでなく、京都府、滋賀県をはじめとした近畿圏を中心に公立・私立高等学校での展開も視野に入れ検討している。 また、宇治市への市民講座、福井県での高校生を対象とした「海外研究者による年縞博物館ガイドツアー」など、一般の方や連携を深めたい地域に研究を周知する機会を得ることができ、これらの成果を次年度にもつなげ継続して取り組む予定である。 次世代を担う立命館の特色ある研究に関しても、文部科学省情報ひろばでの展示や講演会、国際フォーラム等を通じて研究成果の発信をすることができた。</p> <p>(外部評価) 立命館グローバル・イノベーション研究機構の外部評価委員会として、本学出身の企業役員など外部有識者で構成されるアドバイザリー・ボードが組織(構成委員:9名)されており、本事業における外部評価委員会としての役割も果たしている。 2019年11月29日に開催されたアドバイザリー・ボード委員会において、事業の成果報告書案に基づき3名のプロジェクトリーダーがそれぞれの研究紹介を行い、委員から知財の活用や公官庁・企業との具体的な連携のアドバイスを受けた。</p>
<p>⑤2019年度の補助金の使用状況</p>	<p>1. 研究面での補助金使用状況 私立大学研究ブランディング事業の研究推進事業の中核を担う4研究課題の研究経費として、事業計画に基づき経費執行を行った。 ・研究推進費 8,000千円(2,000千円×4研究プロジェクト)</p> <p>2. 広報戦略での補助金使用状況 広報活動としてシンポジウム・セミナー開催、ブランディング事業のホームページ改修、中学生・高校生向け研究紹介冊子の作成、立命館附属校・提携校へ出張セミナー等を行った。 ・立命館グローバル・イノベーション研究機構シンポジウム開催支援 4,562千円 ・ブランディング事業の情報発信力強化 9,378千円 -高校生向けパンフレット作成(VOL. 3) -附属高・提携校にてライスボールセミナー開催 -古気候学研究センター研究推進支援 -各種研究発表展示会等支援 -広報力基盤整備・強化(RADIANT発行)</p> <p>3. その他 ・広報に係る人件費、旅費、イベント用機器、製本費用等 8,060千円</p>

私立大学研究ブランディング事業

2018年度の進捗状況

学校法人番号	261013	学校法人名	学校法人 立命館		
大学名	立命館大学				
事業名	立命館ライフサポート科学で切り拓く高齢化日本の持続的発展モデルの構築				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	31768人
参画組織	立命館グローバル・イノベーション研究機構				
事業概要	<p>21世紀における持続可能で豊かな社会の構築に向けて大学の貢献が求められている。本学では学長のリーダーシップによりこの課題に挑戦する政策的課題解決型の「立命館グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)」を2008年に設立し、「地球の自然回帰」の理念のもと、「自然共生型社会モデル」の形成に貢献してきた。2016年度からは今や4人に1人の高齢者の「社会貢献(活躍)」の推進に軸足を置き、高齢化社会でも経済発展する「高齢先進国の日本モデル」を形成し、海外に波及させる事を本学のブランディング事業の目的とした。</p>				
①事業目的	<p>日本の「高齢先進国」としての現状分析として、「高齢化による医療費・介護費の高騰→社会保障費の増大→国家財政の逼迫→若者への負担増大→若者の将来への希望喪失→少子化の加速」という負の連鎖による国家的危機感が存在している。</p> <p>これに対し本ブランディング事業では、主としてロボットを介在させた運動促進により、高齢者の心と体の健康維持・増進の実現を図ることを当面の目的とし、前記の負の連鎖を、「高齢者が現役で生産労働に貢献→生産年齢人口の増大→医療や介護費の低減→国家財政のゆとり→若者の負担軽減→若者の将来への希望獲得→少子化の抑制」という正の連鎖に変える「日本モデル」の構築を行い、日本経済の発展に貢献することを最終目的とする。</p> <p>この正の連鎖を実現するために、本学では第3期R-GIROの目的として「少子高齢化社会での持続的発展モデルの構築」を掲げ、2016年度より11のプロジェクトを採択し研究を進めている。この中の下記4プロジェクトを本ブランディング事業として特化して研究を進めると同時に、「少子高齢化研究」を立命館大学の研究ブランドとして国内外に広めるため、学術論文、報道機関、産学連携等による研究成果発信を重点的に進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 2) ロボットを高齢者の健康や生活維持に活用できるプログラムの設計 3) 心の健康を維持・増進するロボットの開発 4) 地域が主体の高齢者の健康づくり 				
②2018年度の実施目標及び実施計画	<p>1. 研究面での実施目標及び実施計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 ポリマーなど先端材料を利用して、ロボットをより小型、軽量、柔軟、安価とし、ロボットの利用分野を拡大する。この目標のため、材料、センサ、構造、制御、システム化の研究を進めるとともに、成果の事業化に向けて企業との協力体制を確立する。 2) ロボットを高齢者の健康や生活維持に活用できるプログラムの設計 加齢による筋(骨格筋と心筋)量減少症状「サルコペニア」の察知マーカーの探索と測定法の開発を目標とし、ロボット技術を応用して低侵襲筋生検ツールの開発、薬学的手法による間葉系幹細胞の効率的輸送技術の開発などを実施する。 3) 心の健康を維持・増進するロボットの開発 生活習慣病を予防するための運動継続モデルの構築を目標に、様々な感覚を提示する知覚環境制御デバイスの開発、運動効果を予測するバイオマーカーの開発、衣類型健康行動センシングデバイスの開発、心理状態を検知するメンタルヘルスケアシステムの開発について、その基盤研究を実施する。 4) 地域が主体の高齢者の健康づくり 少子高齢化時代におけるそれぞれの世代(乳幼児～老年)が抱える課題について、行動発達学、神経生理学、ナラティブ心理学、地域社会学、カウンセリング心理学等の立場から学融的調査を行い、対人援助の実現を目標とする。昨年度に引き続き福島県や茨木市での調査・フィールドワークを実施していく。 <p>2. 広報面での実施目標及び実施計画</p> <p>研究成果を国内外に適時広報することにより、研究と大学のブランディング向上を加速させることを目標とする。特に本成果は、日本のみならず高齢先進国として海外への情報発信の必要性和、社会実装への急務から産学連携に結びつく下記計画に力を入れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 海外への発信強化策: 英語版紹介冊子発行、英語版ホームページの制作・公開 2) 国内への発信強化策: 日本語版紹介冊子発行、シンポジウム開催、ホームページ更新 				

<p>③2018年度の事業成果</p>	<p>1.研究面での成果 ロボット技術やマイクロマシン技術により、人間の健康・活動を支援する各種センサやアクチュエータを開発した。また社会科学的調査により、高齢社会が抱える課題を調査し対人援助(老年期の健康づくりなど)の実現など多くの成果を得た。その詳細は「2018年度研究成果報告書」としてまとめた。大学の研究ブランドを高めるため、下記数値に示すように今年度の成果を国内外に広く発信した。 査読付論文(138報)、口頭発表(海外 168件、国内 396件)、シンポジウム・講演(126件)、新聞・TV等報道(42件)、産学連携(84件)、外部資金獲得(61,242万円)、図書(67件)、特許(7件)、受賞(17件) このようなブランディング事業における研究成果とその発信は、立命館大学研究全体の活性化に貢献し、2019年度の科研費獲得に関して申請件数、採択件数、採択率ともに過去最高を記録した。</p> <p>2.広報面での成果 本学広報課とも密接に連携することにより、広報力の強化を目指した。 1)海外への発信強化策:本プロジェクトと強い関連のあるR-GIROの英文紹介冊子を制作し、発行した。また、英語版ホームページを制作し、公開した。 2)国内への発信強化策:事業展開を紹介するホームページの改修(研究および研究者紹介の動画を新規で6名追加し作成)、一般・高校生向け和文紹介冊子の制作・発行(VOL.1,VOL.2各7,400部)、R-GIROとの共催シンポジウムの開催などを行った。 3)附属高の生徒向けに、出張版ライスボールセミナー(セミナー形式の若手研究者による自己研究紹介)を実施した。 4)イノベーションジャパンやイノベーションKANSAIでの展示会への積極的な関与を行った。</p>
<p>④2018年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価) 1. 研究進捗の自己点検・評価 ブランディング事業運営委員会において、毎月研究に関するアドバイスをを行うとともに、半年ごとに提出される報告書に基づき進捗状況が検討され、今年度の研究成果及びその発信は前述の数値が示すように順調に行われていることが確認された。 特に、成果の情報交換強化のため海外研究機関との連携・ネットワーク形成を行ったこと、成果の実用化を進めるため企業(約20社)との協力体制を確立したこと、学外(東京、沖縄、大阪、等)において公開シンポジウムや成果の体験イベントを実施したこと、などが本事業の推進に大きく寄与した。</p> <p>2.広報戦略の自己点検 計画した課題は全て推進することができた。 ホームページ訪問数の増加を目指し、研究や研究者の紹介用動画を作成、追加した。現在その効果を検討しており、継続して取り組む予定である。また教員から共同研究の推進、海外留学生の確保等のために強い要望のある英語版資料の発行に注力した。これらの成果は2019年度以降となるが、広報を通じた高いブランディング力向上が期待できるものと判断している。また、高校生向けに研究を分かりやすく紹介するパンフレットを制作し、配布した附属校・提携校から好評を得た。</p> <p>(外部評価) R-GIROの外部評価委員会として、本学出身の企業役員など外部有識者で構成されるアドバイザリーボードが組織(構成委員:9名)されており、一昨年度から本事業における外部評価委員会としての役割も果たしている。 2018年12月21日に開催されアドバイザリーボードにおいて、事業の成果報告書案に基づき4名のプロジェクトリーダーがそれぞれの研究紹介を行い、委員から知財の活用や公官庁・企業との具体的な連携のアドバイスを受けた。</p>
<p>⑤2018年度の補助金の使用状況</p>	<p>1.研究面での補助金使用状況 ブランディング事業の中核となる4研究課題の研究経費として、事業計画に基づき経費執行を行った。 ・研究推進費 12,000千円(3,000千円×4研究プロジェクト)</p> <p>2.広報戦略での補助金使用状況 広報活動としてシンポジウム・セミナー開催、ブランディング事業のホームページ改修、冊子の作成等を行った。 ・R-GIROシンポジウム開催支援 1,400千円 ・R-GIROの国際発信力の強化支援 2,500千円 -英語版HP制作費用、パンフレットの制作・印刷製本等 ・ブランディング事業の情報発信力強化 9,100千円 -ホームページの改修(日本語ページのデザイン変更、英語ページの制作、撮影済み10名の翻訳・テロップ編集、新規6名の撮影・編集・翻訳・テロップ編集等) -高校生向けパンフレット作成(VOL.1、VOL.2) -附属高にてライスボールセミナー開催 -展示会等出展 -RADIANT(研究活動報)作成費</p> <p>3.その他 ・広報に係る人件費、旅費、シンポジウム用機器等 5,000千円</p>

私立大学研究ブランディング事業

2017年度の進捗状況

学校法人番号	261013	学校法人名	学校法人 立命館		
大学名	立命館大学				
事業名	立命館ライフサポート科学で切り拓く高齢化日本の持続的発展モデルの構築				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	30888人
参画組織	立命館グローバル・イノベーション研究機構				
事業概要	<p>21世紀における持続可能で豊かな社会の構築に向けて大学の貢献が求められている。本学では学長のリーダーシップによりこの課題に挑戦する政策的課題解決型の「立命館グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)」を2008年に設立し、「地球の自然回帰」の理念のもと、「自然共生型社会モデル」の形成に貢献してきた。2016年度からは今や4人に1人の高齢者の「社会貢献(活躍)の推進」に軸足を置き、高齢化社会でも経済発展する「高齢先進国の日本モデル」を形成し、海外に波及させる事を本学のブランディング事業の目的とした。</p>				
①事業目的	<p>日本の「高齢先進国」としての現状分析として、「高齢化による医療費・介護費の高騰→社会保障費の増大→国家財政の逼迫→若者への負担増大→若者の将来への希望喪失→少子化の加速」という負の連鎖による国家的危機感が存在している。</p> <p>これに対し本ブランディング事業では、主としてロボットを介在させた運動促進により、高齢者の心と体の健康維持・増進の実現を図ることを当面の目的とし、前記の負の連鎖を、「高齢者が現役で生産労働に貢献→生産年齢人口の増大→医療や介護費の低減→国家財政のゆとり→若者の負担軽減→若者の将来への希望獲得→少子化の抑制」という正の連鎖に変える「日本モデル」の構築を行い、日本経済の発展に貢献することを最終目的とする。</p> <p>この正の連鎖を実現するために、本学では第3期R-GIROの目的として「少子高齢化社会での持続的発展モデルの構築」を掲げ、2016年度より11のプロジェクトを採択し研究を進めている。この中の下記4プロジェクトを本ブランディング事業として特化して研究を進めると同時に、「少子高齢化研究」を立命館大学の研究ブランドとして国内外に広めるため、学術論文、報道機関、産学連携等による研究成果発信を重点的に進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 2) ロボットを高齢者の健康や生活維持に活用できるプログラムの設計 3) 心の健康を維持・増進するロボットの開発 4) 地域が主体の高齢者の健康づくり 				
②2017年度の実施目標及び実施計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究面での実施目標及び実施計画 <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 小型、軽量、柔軟なロボット開発のためのアクチュエータ/センサの材料開発、デバイス化の研究開発、システム化の試作を目的とし、センサやアクチュエータに粘弾性要素を効率的に取り組む方法やその特性解析を行う。 2) ロボットを高齢者の健康や生活維持に活用できるプログラムの設計 高齢者の健康維持のため、加齢により骨格筋量が低下し握力低下や歩行困難に結びつくサルコペニア診断の簡易化を目的に、ロボット技術を応用し、サルコペニア患者の細胞を扱う多自由度マイクロフィンガーや伸縮マイクロアクチュエータの開発等を行う。 3) 心の健康を維持・増進するロボットの開発 生活習慣病予防に必要な運動を習慣化するための運動継続モデルの構築を目的とし、今年度は知覚環境として音や香り制御基礎技術の開発、体内環境として運動により分泌されるストレスホルモンの解明、フィジカル/メンタルヘルスケアの計測/評価方法の開発を行う。 4) 地域が主体の高齢者の健康づくり 少子高齢化時代における各世代が抱える課題について、科学的根拠に基づいた対人援助の実現を目的とし、今年度は、福島県における予防医学・健康づくりのニーズ調査・フィールドワーク調査を実施し、高齢者の健康、地域コミュニティーの活性化、地域の安全安心への取り組みを目指す。 2. 広報面での実施目標及び実施計画 研究成果を国内外に適時広報することにより、研究と大学のブランディング向上を加速させることを目標とする。特に本成果は、日本のみならず高齢先進国として海外への情報発信の必要性和、社会実装への急務から産学連携に結びつく下記計画に力を入れる。 <ul style="list-style-type: none"> ・海外への発信強化策: 英語版紹介冊子発行準備 ・国内への発信強化策: 日本語版紹介冊子発行、学内機関誌発行、シンポジウム開催、ホームページ更新、広報担当者の雇用 				

<p>③2017年度の事業成果</p>	<p>1.研究面での成果 前年度の予備的研究段階を経て、今年度から本格的な研究開発が行われた。 本事業の4プロジェクトの具体的研究成果を、「私立大学研究ブランディング事業2017年度研究成果報告書」としてまとめた。ここでは4プロジェクトを総合した成果の一部を数値で示し、事業が順調に進んでいることを示す。 査読付論文(109報)、国際発表(135件)、シンポジウム・講演(85件)、新聞報道等(51件)、産学連携(91件)、外部資金獲得(34,066万円)、図書(37件)、特許(11件)、受賞(19件) これらの成果は科研費獲得にも貢献し、新規採択案件は私立大学4位と躍進し、配分研究費は私立大学3位を堅持している。</p> <p>2.広報面での成果 本学広報課とも密接に連携することにより、広報力の強化を目指した。 ・海外への発信強化策:本プロジェクトと強い関連のあるR-GIROの英文紹介冊子発行に向けた和文紹介冊子の英訳化準備および英語版ホームページの作成準備。 ・国内への発信強化策:事業展開を紹介する和文紹介冊子発行済(3000部)、機関誌発行済(「RADIANT」vol5.6.8)各和文冊子5000部、英文冊子2500部)、R-GIROとの共催シンポジウム開催済、ホームページ更新(動画による研究および研究者紹介を作成、開設済)、広報担当者の雇用実施済 ・また、イノベーションジャパンや日本科学未来館での展示会への積極的な関与、成田空港での社会実装実験等にも注力した。</p>
<p>④2017年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)</p> <p>1.研究進捗の自己点検・評価 研究の進捗は、毎月1回開催する事業運営委員会に報告され、適宜アドバイスを行う。 また、R-GIROの組織との連携で各プロジェクトに配置されたシニアアドバイザー(学内有識者)による幹事会、全学部の学部長も含めたR-GIRO運営委員会において、月1回定期的に本事業の点検を行う。 半年ごとに提出される報告書に基づき、各委員会でその進捗が検討されたが、特色ある研究として着実に成果が出ていることが確認された。</p> <p>2.広報戦略の自己点検 実施計画よりも若干の遅れが生じているものの、計画した課題は全て推進することができた。 さらに新たな試みとして、ホームページ訪問数の増加を目指して研究や研究者の紹介用動画を作成した。現在その効果を検討しており、継続して取り組む予定。また教員から共同研究の推進、海外留学生の確保等のために強い要望のある英語版資料の発行に注力した。 これらの成果は2019年度以降となるが、広報を通じた高いブランディング力向上が期待できるものと判断している。</p> <p>(外部評価)</p> <p>R-GIROの外部評価委員会として、本学出身の企業役員など外部有識者で構成されるアドバイザーボードが組織(構成委員:11名)されており、昨年度から本事業における外部評価委員会としての役割も果たしている。 2017年12月15日に開催されアドバイザーボードにおいて、事業の成果報告書案に基づき各プロジェクトリーダーが説明を行い、委員から多くのアドバイスを受けた。 要約すると、研究の理念・目的は将来を見据えた社会的課題であり他研究機関に先駆けた新規で独創的であること、研究の進捗は順調であり成果も着実に出ていること、さらに研究成果だけではなく次代を担う若手研究者の育成にも力を入れていることなど、高い評価を得ることが出来た。 なお、成果の発信を学術分野だけでなく、社会に向けてわかりやすく広報することも必要とのアドバイスを受けた。この点は次年度に向けての検討課題とする。</p>
<p>⑤2017年度の補助金の使用状況</p>	<p>①研究面での補助金使用状況 ブランディング事業の中核となる4研究課題の研究経費として、事業計画に基づき経費執行を行った。 ・研究推進費 8,000千円(2,000千円×4研究プロジェクト)</p> <p>②広報戦略での補助金使用状況 広報活動としてブランディング事業のホームページ改修(研究者の動画撮影・編集等)、ブランディング事業の紹介冊子作成(2017年度発行済み)、R-GIROホームページの改修、学内広報機関誌、またシンポジウム開催等費用として経費執行を行った。 ・印刷製本、HP改修費用等 12,600千円 ・シンポジウム、成果発信としての展示等(日本科学未来館等)8,400千円</p> <p>③その他 ・広報にかかる人件費 1,000千円</p>

私立大学研究ブランディング事業

2016年度の進捗状況

学校法人番号	261013	学校法人名	学校法人 立命館		
大学名	立命館大学				
事業名	立命館ライフサポート科学で切り拓く高齢化日本の持続的発展モデルの構築				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	28620人
参画組織	立命館グローバル・イノベーション研究機構				
事業概要	21世紀における持続可能で豊かな社会の構築に向けて大学の貢献が求められている。本学では学長のリーダーシップによりこの課題に挑戦する政策的課題解決型の「立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）」を2008年に設立し、「地球の自然回帰」の理念のもと、「自然共生型社会モデル」の形成に貢献してきた。2016年度からは今や4人に1人の高齢者の「社会貢献（活躍）」の推進に軸足を置き、高齢化社会でも経済発展する「高齢先進国の日本モデル」を形成し、海外に波及させる事を本学のブランディング事業の目的とした。				
①事業目的	<p>日本をはじめとする欧米の先進国やアジアの発展途上国においても、2040年には高齢化率が25%を越える状況となっている。とりわけ日本は「高齢先進国」としてすでに2016年に26%に達し、世界中で最も高い状況にある。その結果、医療や介護費、さらに社会保障費の増大や生産年齢人口の減少等が遠因・近因となり、国家財政の逼迫、産業の衰退危機、若者への負担増大などが若者の将来への希望を喪失させ、少子化への要因となっている。しかし、今こそ日本が世界に先駆けて「少子高齢化立国」を構築し、人口問題に臨機応変に対応する経済的発展モデルを世界に誇示できる絶好の機会である。</p> <p>高齢先進国の経済的発展のためには、「少子高齢化でも活力ある社会の構築」が不可欠である。そのためには高齢者も生産に携わる中核の労働者として生き生きと働く環境の整備、労働意欲の高揚が必須となる。そこでR-GIROでは「健康寿命の延伸」および「人口オーナスを補完するロボット」の実現を目指して研究を推進する。この成果が、具体的に目に見える形で「医療・介護費の削減」につながれば目的の50%は達成されたものと言える。残りの50%は広報戦略の充実にある。我々の目標とする「少子高齢化でも活力ある社会の構築」を100%実現するには、得られた学術・研究面での成果を「国の政策」に反映させねばならない。このためには広報戦略が研究成果創出と同じ比重で重要となる。</p> <p>R-GIROでは、得られた研究結果をブランディング事業を介していち早く社会に還元し、日本の最大懸念である「国家財政の逼迫」「産業の衰退危機」「少子化」課題の解決を促進し、「高齢先進国の日本モデル」を構築する。その後、このモデルを世界に発信し、国内のみならず海外での社会貢献を目指す。その目標達成には、本研究ブランディング事業の支援なしには達成はなし得なく、立命館大学のように研究成果の発信をこのブランディング事業に大きく委ねている大学は数少ないと思われる。</p>				
②2016年度の実施目標及び実施計画	<p>本事業は、①研究面と②広報面でのPDCAサイクルが要求され、この二面の実施目標及び実施計画を個別に記載する。</p> <p>① 研究面での実施目標及び実施計画</p> <p>研究の目標は本学がほぼ10年間継続しているR-GIROの理念である「持続可能で豊かな社会（サステイナビリティ）の追求」を実現するためである。具体的にブランディング事業で2016年度の挑戦する研究課題は下記の4課題であり、2016年度の具体的実施計画を（ ）内に記載する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の健康寿命の延伸に貢献する「人にやさしい」ロボットの設計・試作 (2016年度計画：柔軟な先端材料に置き換えるための新材料の開発(プラスチック系最適素材の検討)) ・ロボットを高齢者の運動や生活維持に活用できる運動プログラムの設計 (2016年度計画：測定が簡便・容易な血液、唾液、尿中のサルコペニアの察知マーカーの探索と測定法の開発指針の決定) ・高齢者の心の健康を維持・増進するロボットの開発 (2016年度計画：インターネット技術、IoT技術を用いた生理、動作信号のスマートウェア上での処理技術、ウェアラブルセンサーとロボット間での双方向通信技術の開発指針の決定) ・地域が主体の高齢者の健康づくり (2016年度計画：個々人の生活の質(QOL)を定量的かつ定性的に捉える方法論の検討) <p>② 広報面での実施目標及び実施計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング事業成果発信のWG体制整備 ・広報の戦略のプライオリティの決定 				

<p>③2016年度の事業成果</p>	<p>事業成果も①研究面での成果と②広報面での成果を個別に記載する。</p> <p>①研究面での成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究活動においては各課題について、2017年度の具体的実施計画を立て、予備実験を開始し、短期間での成果も得ている。 ・これらの予備実験結果により、論文投稿や科研費をはじめとする外部資金が獲得され、2017年度の研究が順調に進行している。 <p>②広報面での成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング事業検討委員会を設置し、ブランディング構築に向けた工程や指標の確認を毎月行っている。 ・2017年2月24日に当該事業に関するキックオフシンポジウムを開催した。シンポジウムには企業からの参加者も多かったことから、研究の進捗を報告するだけでなく、参加企業に対して研究成果の社会実装を進めるべく共同研究等のアプローチを積極的に継続して行なっている。 ・その他の2016年度の広報活動に関連した取組は以下のとおり ・新聞報道（R-GIRO事業で「少子高齢化課題」の研究開始を報道） ・学内広報機関誌（RADIANT）の発行（テーマ：少子高齢化） ・学内広報機関誌（RADIANT）の発行準備（テーマ：ロボット、2017年7月発刊予定） ・ホームページの開設（http://www.ritsumeai.ac.jp/research/branding/） ・ブランディング事業に携る若手研究者の学内研究発表会の開催（ライスボールセミナーとして3キャンパス全てで開催実施）
<p>④2016年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>（自己点検・評価）</p> <p>①研究進捗の自己点検</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016～17年度前半で学内公募型により、ブランディング事業参画の4研究グループの確定 ・各グループに1名のシニアアドバイザー（学内有識者）を配置し、研究の進捗に合わせて、最適な産学連携パートナーの探索や適切な競争的資金の応募に向けたアドバイスを実施し、年間を通じて研究グループの研究推進をサポートする体制を構築（なお、ブランディング事業成果発信WGとR-GIRO運営委員会の参画メンバーは一部が兼任することによって、研究活動とブランディング活動を連動させて進める工夫を図っている。） ・2016年度の研究進捗確認は、各学部長も構成員となっているR-GIRO運営委員会においてそれぞれの研究グループが報告書を提出し、特色ある研究拠点として着実に成果が創出されていることを確認。 <p>②広報戦略の自己点検</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング事業検討委員会（2017.4.11）において2016年度の進捗状況を確認するとともに、2017年度に向けての課題を議論した。体制整備やHP開設、広報誌の発行といった初年度の計画が概ね達成されたことを確認した。 ・ブランディング事業の成果発信を全学的に進めて行く為に、2017年度から研究部（本学の研究支援・推進組織）に加えて広報課（本学の広報担当組織）及び学外有識者をブランディング事業検討委員会に新たにメンバーとして加えることとした。 <p>（外部評価）</p> <p>R-GIROにおいて、企業役員（本学OB）をはじめとする外部有識者で構成されるアドバイザーボードが組織されており、今後本事業においても、個別の研究プロジェクトに加え、研究成果の発信手法を含めた総合的な提言を受けて今後の事業に活かしていく予定である。（2017年度アドバイザーボードは12月に開催予定）</p> <p>2016年度のアドバイザーボードにおいては、ブランディング事業の全体構想の紹介と一部先行実施したライスボールセミナー（立命館大学の教職員・若手研究者・大学院生・学部生、など学内関係者を参加対象として昼食の時間に軽食をとりながら、研究者の研究発表およびフリーディスカッションを実施）が外部有識者から高い評価を得ることが出来た。</p>
<p>⑤2016年度の補助金の使用状況</p>	<p>①研究面での補助金使用状況</p> <p>ブランディング事業の中核となる4研究課題の研究経費として、事業計画に基づき下記の経費執行を行なった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消耗品費（実験機器・用具等） 10,000千円 ・研究用機器備品 73,177千円 <p>（Object 350 Connex3 3Dプリンタシステム、水中モーションキャプチャシステム、タンパク質多項目同時測定システム、光イメージング脳機能測定装置、サーマルディジプレートシステム、グラフェンCVD装置、電気化学アナライザー、共焦点顕微鏡）</p> <p>②広報戦略での補助金使用状況</p> <p>広報活動としてR-GIROの紹介冊子（2017年度発行済）および私大ブランディング事業の紹介冊子の発行に向けた取材活動（2017年度発行予定）、学内広報機関誌（2回：テーマを少子高齢化（2016年度発行）とロボット（2017年度発行）に設定）、またシンポジウム開催（R-GIROシンポジウムと合同開催）やホームページの開設費用として経費執行を行なった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・印刷製本、HP開設費用等 13,200千円 ・シンポジウム開催費 1,800千円 ・成果発信セミナー開催費 3,000千円 <p>③その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広報にかかる人件費 1,800千円 ・講師謝金等 180千円 ・外部委託費等（広報戦略）20千円